資料４　第６回佐賀県立高等学校生徒減少期対策審議会　概要

日　時：平成２４年６月１２日（火）１４時３０分～１７時１０分
場　所：県庁特別会議室Ａ（佐賀市城内１丁目１番 59 号）
参加者：委員（代理を含む）（１６名）、事務局（９名）
会　順：（１）　開会
（２）　会長挨拶
（３）　議事
①　県立高校の在り方（活性化方策）に係る審議
・　家庭科
・　その他職業系専門学科
・　総合学科
・　普通科・普通系専門学科（通学区域に係る検討を含む。）
・　定時制・通信制
②　学科の配置・構成
③　その他
（４）　その他
（５）　閉会

〔会議の概要〕
１　開会
２　会長挨拶
３　議事
（１）　県立高校の在り方（活性化方策）に係る審議
①　家庭科
③　その他職業系専門学科
③　総合学科
④　普通科・普通系専門学科（通学区域に係る検討を含む。）
⑤　定時制・通信制
（２）　学科の配置・構成

※　議事の都合により、普通科に係る審議を最初に行った。
※　時間の都合により、学科の配置・構成についての審議は次回に持ち越すこととなった。

〔主な質問、意見等〕（☆は会長、○は委員、◆は事務局）

（１）　県立高校の在り方（活性化方策）について

①　普通科・普通系専門学科の在り方（活性化方策）について
（通学区域についての議論を含む。）

○　普通科も規模が小さくなっており、現状がぎりぎりだと思うが、各校とも特色を出して活性化を図っている。また、特色を出すために普通科に置いたコースについては、資料にあるとおり、これまで一定の役割を果たしてきたが、状況の変化ということもあり、見直しの時期であろう。
　普通科の活性化は、進学面での期待に応えることではないかと思う。

○　大学受験力の向上について、事務局は具体的にどういう方策を考えているのか。

◆　現役で国公立大学に合格する生徒が減少傾向であることについては、センター試験の結果等から生徒たちの学力や教師の教科指導力ではなく、受験指導のノウハウの不足が課題だと分析している。
　このことを踏まえ、具体的な方策として、
　１　大学受験に向けた教員の指導力の向上
　２　大学入試問題の分析
　３　意識啓発と意欲の喚起
　４　教育の実践
の４つの柱に基づき、取組を行うこととしている。
　それぞれの学校で、これまで熱心に取り組んでもらっているが、学校だけでは取り組みにくい事業について県が中心となってやっていく。

○　指導力向上のために他県に先生を派遣するということだったが、難関大学にたくさん合格者を出すような学校に派遣するのか。

◆　いろいろあると思うが、予備校など大学受験に特化した機関への派遣を考えている。また、先進的な学校の取組も見たい。そういうところで教科指導等とは別の、受験に関わるノウハウを学んでもらいたい。難関大学に的をしぼるわけではない。国公立大学の進学率を上げることが目標である。生徒、保護者の希望に沿うよう、現役での国公立大学につなげたい。

○　期間はどのくらいか。

◆　予備校には先生向けの講座もある。期間も対象大学も様々である。
　また、予備校講師を招聘して佐賀で研修会を開催することも考えてい

る。

○　佐賀北の芸術コースは特色があって、（芸術を学べる高校は）他には佐賀女子校しかない。コースは廃止の方向か。

◆　コースをなくすことが前提ではない。目的は、学校の特色づくりである。一層の特色づくりのための方策について、学校にも検討を依頼している。

☆　通学区域について、意見を聞きたい。

○　前々回、全県一学区については十分な議論が必要であると発言した。全県一学区にしたところは、全県一学区のデメリットが表面化しつつあるのではないかと思う。普通科の課題は学力向上ということは理解するが、全県一学区にしたとき、学校間で学力によるランク付けが起こるのではないか。高校はそれぞれの地域で教育の風土を培ってきた。全県一学区にするメリットは何か。

○　全県一学区がどちらかといえばよい。遠距離であっても、どうしても通学区域外の高校へ行きたいという子もいる。また、その方が県全体の学力アップにつながるのではないか。他県の例を見ても、全県一学区に変更して、志願状況に大きな変化はないようだ。子どもたちにとって、学校選択幅が拡大することはよいのではないか。公共交通機関を使って通学する場合、通学区域内より通学区域外の高校に通う方が利便性が高く、通いやすいこともある。どの高校で学ぶのか、子どもたちに選択させてもよいのではないか。

○　大学に合格するということももちろん大事だが、学力とは、自分の夢をどれだけ実現できるかということではないかと思う。全県一学区にすると、教育に関する地域の風土が失われる懸念がある。成績による学校のランク付けが生じるのではないか。

○　学校のランク付けが目的ではない。（行きたい高校を）自由に選択ができた方がいいのではないか。中高一貫校ができて、市町の中学校では規模が小さくなった学校もある。しかし、中高一貫校ができたことで、小学生の学校選択幅は拡大した。中学生の学校選択幅も拡大する方がよいのではないか。

☆　中間まとめでは、「通学区域については、拡大の方向で検討することが望ましい。」としていた。通学区域拡大については、メリットとデメリットを踏まえつつ、両者のバランスを取ることが必要である。学区を拡大するやりかたは、全県一学区とする以外に、通学区域数の削減とか、入学可能枠の拡大などもある。このことについて委員の意見を聞きたい。

○　通学区域を拡大しても、特定の高校への集中は起きないと思う。しかし、高校の通学区域等が変われば、中学校は影響を受ける。

○　通学距離が長くなって、通学に時間がかかるようになると、高校生活の充実は難しくなるのではないか。保護者の負担も大きくなる。

○　今は私立高校の経費が安い。そういうことも考えないと、県立高校の活性化にはつながらないのではないか。

○　学力向上について、各校の競争だけでは十分な成果は上がっていなかったという説明だったと思う。日本はグローバル化が進んで、地域は疲弊している。県全体の向上を図るときに、競争的な原理を持ってくると影響がでるのではないか。通学区域の見直しは慎重に行ってほしい。

☆　全県一学区にすると決まっているわけではない。県の全体的な学力向上には、基礎的な学力を上げることと能力のある生徒を伸ばすことが必要だと思っている。そういうことに全県一学区が寄与すればいいのではないか。

☆　普通科のコースの見直しについて、委員の意見を聞きたい。

○　見直しを行ったコースは志願者が減っていたのか。

◆　極端ではないが、何回か定員割れを起こしていた。例えば、佐賀東高校の体育コースや鹿島高校の理数コースは、予備調査の段階でも、希望者が少なかったので、コースを廃止した。

○　ここで示されているコースは、高校２年生くらいから、進路志望に応じて分ける文系コース、理系コースとは違うのか。

◆　文系、理系コースとは違って、入学の選抜段階から分けて募集している。入学時にコースが決まっており、その後の変更ができないことも志願者が少ない理由かと思う。

○　既に見直しを行った体育コースと、検討中の芸術コースの違いは何か。志願者数の問題か。

◆　コースの見直しについては、志願者が少ないことも一つの要因ではあ

るが、特色がないから見直すというわけではない。例えば英語コースは特色がなくなったというより、普通科教育の中で英語教育に重点的に取り組むような学習指導要領の改訂などもあったことから、コースを見直して、募集停止とした。コースの見直しは、コース制の意義や入学者の状況等を総合的に判断した結果である。

○　コースの見直しについて柔軟に対応していることは理解した。

☆　大学生を見ていて課題だと思うことは、学びに対する意欲が低いということだ。大学では、能力、自立と主体性を中心に教育体制を組み立てる。中学生、高校生に対しては、学ぶ意義についての意識啓発が必要である。

○　小学校でも中学校でも職業について学ぶ機会がある。特に中学校では職場体験をし、それをきっかけとして将来の職業や進学する高校などを考えることになるが、(高校受験をするときに) 力が足りないことを知り、勉強するようになる。キャリア教育には連続性が大事だと思う。また、そういう学び方をしていることを親も知っておく必要がある。

○　大学に行くことが目的ではない。不平等で不自由なところもある社会で、できるだけ公正、自由に生きるために、どういう職業に就いて、どんな仕事をすればいいのか、どういう人間になりたいのかを考える、そういう教育が必要だ。

②　家庭科の在り方（活性化方策）

○　事務局から説明があったように、牛津高校は全国でも珍しい家庭科の単独校である。全県から生徒が集まっている。しかし、学んだことを卒業後の進路に生かせているかどうかについては難しい状況である。資料にもあるように、生活関連産業のニーズ把握が難しいためである。

　県全体の家庭科の活性化方策としては、牛津高校を中心校として、ネットワークを作っていくことが良いと思う。そして、佐賀ではこんなことをしていると全国に発信していく。早くやってほしい。

○　公立で家庭科単独の唯一の高校である。ここにもコースが設置されているが、見直しについてはどうか。

◆　県の方針として、コースを見直すこととしていたので、来年度（H25年度）から牛津高校は２つのコースをそれぞれ単独の学科（フードデザ

イン科、食品調理科）に改編することが決定している。このことで、専門性をより高めることができる。

○　牛津高校は、前の再編計画で統合の対象校だった。今は、志願者も増え、ユニークな高校として特色もある。交通の便もいいし、男子生徒もおり、活性化している。残してほしい高校である。

○　牛津高校の話しを聞いていると、全県一学区であることはいいことだと思う。全県一学区だから、生徒が集まってくる。県の北部や南部にも同じような特色のある高校があるといい。

○　現在３校に家庭科の学科があり、他に作ることは難しいだろう。現状を維持するためにも、資料にあるようなネットワークづくりが必要だ。前回の資料を見ていたら、他の学科については、拠点校を設置するとなっており、いいことだと思う。

○　学力向上についても、普通科高校に拠点校を作ってネットワークをつくってはどうか。活性化につながると思う。

☆　コースから学科への改編により、生徒がぜひ学びたいと思うような専門教育を行うことができると考える。

○　９月の予備調査で、牛津高校は毎年２倍近い倍率があるのに、クラス増をしない理由は何か。

◆　この審議会のテーマでもあるが、生徒減少期なので、募集定員を減らすことを基本に考えている。また、牛津高校の食品調理科は、厚生労働省の指定を受けており、学級増を行うとそれに合わせて施設設備の整備や教職員の増員も必要になる。

③　その他職業系専門学科

☆　本県には設置していない学科である。情報提供ということである。

○　（委員了承　意見等なし）

④　総合学科の在り方（活性化方策）

○　農業高校や工業高校が母体であるが、現在は半分就職、半分進学という説明であった。専門性が薄まっていることが課題だといえないか。また、中学生や保護者の理解が不足していることも課題である。

○　一番の課題は、十分なキャリア教育がやれているかどうかだ。

○　母体となった高校をもとに、コース制（系列）を設定しているようだが、中身が漠としていて見えにくい。進路への意思を持たずに入ってくる生徒については、初年次教育が必要である。選択の多様性という利点は生かしつつ、高校での過ごし方や学び方、将来何になりたいのか、どうしたいのかを考えさせていく必要がある。

○　工業高校や商業高校を志望していた中学生が進路変更して総合学科へ進学することもある。入学当初、進路志望が明確でない生徒の中にはそういう生徒もいるのではないか。しかし、１年間の教育の中で進路目的が持てるよう指導がされていることを中学校関係者として実感している。

○　総合学科の生徒は３年間で非常に成長しているという印象を持っている。進路志望があいまいだった生徒が、進路に対する方向性を持つようになり、卒業後はきちんと進学や就職をしている。キャリア教育については、１年次に「産業社会と人間」を実施し、２年次、３年次では「総合的な学習の時間」でコミュニケーション力やプレゼンテーション力を高めるような指導をしており、成果発表会はもとより、就職にも役に立っていると聞いている。

○　成果発表会（研究発表会）には、関心のある中学生や保護者、中学校の先生方も参加し、総合学科への理解を深めるのに役に立っている。実際に高校生の姿を見ることで、中学生もいろいろ考えることができる。そういう機会は大切である。総合学科高校は積極的に情報発信をしていると思う。

○　「産業社会と人間」の指導方法について研究授業を行い、指導法を共有するといいのではないか。総合学科どうしが連携できるような研究組織がないのであれば、そういう組織を作って、指導法を共有したり、合同成果発表会を行ったりすれば、県民、中学生に広くアピールできると思う。

☆　４校が連携して、活性化につなげていく。横のつながりによって、切磋琢磨できる環境を作って、教育効果を上げていけるといい。

○　県として進学型総合学科は考えていないのか。
◆　他県にはそういう総合学科もあるが、本県の場合、総合学科４校のうち３校の母体校がもともと職業系専門高校だったこともあり、現状を考えるとすぐに進学型総合学科へ転換することは難しい。

⑤　定時制・通信制
○　定通併置校ができなかったのは、校地の問題なのか。
◆　そうである。その後、二次再編で鳥栖地区の定時制を再編したため、定通併置を作るに当たって再編統合する学校の組み合わせも見直す必要がある。
○　定通併置校を設置すると、現在の定時制がそこへ集約されるのか。
◆　現在の生徒数を考えると集約する方向になる。
☆　全国の状況を見ても支援が必要な生徒が多いようだが、教員の加配はあるのか。
◆　本県の場合は定員充足率が低く、少人数学級になっており、不登校経験のある生徒も教室に入っていけるようだ。人的加配は特にないが、先生方の努力でやれている。
○　定時制や通信制は、統廃合して集約化すると、通学が不便になるので、定通併置校に集約するより現状維持を考えてもらいたい。

◆　もともと定時制も通信制も勤労生徒に学習する機会を提供することが目的だったが、近年では不登校経験者など支援が必要な生徒も在籍している。そういう生徒への対応として、昼間定時制の検討が必要になる。このことについて委員の考えを聞かせてほしい。
○　太良高校が不登校経験者などを募集しているが、県として矛盾はないか（関係を検討すべきではないか)。
◆　太良高校は全日制なので、矛盾はない。
○　矛盾しないならば、昼間定時制があってもいいのではないか。

○　昼間定時制の場合、全日制との併置だと使用教室が問題となるが、（学級減で）空き教室もあるので、そこを使うといいのではないか。
○　小中学校の統廃合で空いた学校や空きビルなども考えられるのではな

いか。

◆　体育などを実施するための施設も必要である。設置基準を満たさないといけない。本県の定時制はすべて全日制に併設しているので、これまでは施設の心配は不要だった。

○　不登校などから引きこもりになると、親は大変である。手厚く支援が受けられるような制度を作れないか。

○　校舎の問題ひとつとっても、生徒への支援についても、複雑な問題が多い。簡単にはいかない。

（２）学科の配置・構成

時間の都合により、「学科の配置・構成」は次回に持ち越すこととなった。

４　その他（第７回、第８回審議会の日程調整について事務局より連絡）

５　閉会